慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「円錐形」の哲学について
Sub Title	Sur la philosophie du cone
Author	石井, 敏夫(Ishii, Toshio)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1997
Jtitle	哲學 No.102 (1997. 12) ,p.81- 98
JaLC DOI	
Abstract	Dans Matiere et memoire Bergson represente la memoire par un graphique de cone. Ce graphique, qui est nomme le cone bergsonien par Pierre Trotignon, est donne pour representer la structure et le mode d'etre de la memoire tels que Bergson les comprend. Dans cet article, je cherche a l'interpreter et approfondir la fonction de la memoire que Bergson a determinee. Les questions suscitees par ce cone, et que je presenterai bientot, ne sont guere concordantes avec celles de Trotignon. Les sujets de la psychologie bergsonienne de la memoire, et que je me propose de passer en revue, sont les suivants: impulsif, reveur, souvenir image, idee generale. Les mots clefs de la psychologie bergsonienne sont, me semblet-il, tension ou attention a la vie, expansion, dispositions mentales diverses ou degres de tension de la memoire. Je me propose d'expliquer ces termes clairement autant que possible.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000102-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「円錐形」の哲学について

石　井　敏　夫*

Sur la philosophie du 《cône》

Toshio Ishii

Dans 《Matière et mémoire》 Bergson représente la mémoire par un graphique de cône. Ce graphique, qui est nommé le 《cône bergsonien》 par Pierre Trotignon, est donné pour représenter la structure et le mode d'être de la mémoire tels que Bergson les comprend. Dans cet article, je cherche à l'interpréter et approfondir la fonction de la mémoire que Bergson a déterminée. Les questions suscitées par ce cône, et que je présenterai bientôt, ne sont guère concordantes avec celles de Trotignon. Les sujets de la psychologie bergsonienne de la mémoire, et que je me propose de passer en revue, sont les suivants:

《impulsif》, 《rêveur》, 《souvenir image》, 《idée générale》.

Les mots clefs de la psychologie bergsonienne sont, me semble-t-il, 《tension ou attention à la vie》, 《expansion》, 《dispositions mentales diverses ou degrés de tension de la mémoire》.

Je me propose d'expliquer ces termes clairement autant que possible.

* 国士舘大学文学部非常勤講師（倫理学）

「円錐形」の哲学について

ベルクソンは『物質と記憶』のなかで記憶力を真っすぐに倒立する円錐体がその頂点を一つの平面に接触させている図 (MM, 169, Fig. 4)〔図 1〕によって表している．この円錐図形は彼が考える記憶力の構造とその存在様態を示すためのものであり，円錐の各部分が有する意味はそれが接する面の意味とともに明瞭に規定されているから，この図を読み解くのに必要な知識は十分に与えられている．以下では，この図の解読を出来る限り推し進めて，著者が理解する記憶力の基本的な機能を追跡してみたい．考察に入る前にベルクソン哲学研究史におけるこの図形の扱いに関して一言述べておこう．私の知る限りでは，ドイツ哲学に造詣が深くハイデガー研究

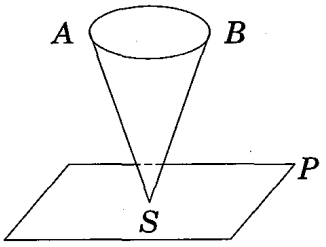

図 1

者としても知られているピエール・トロティニオンが，「ベルクソンの円錐」を意識の生における創造の「構造」を「イメージ」化したものとみなしてその解釈を試みている (《L'idée de vie chez Bergson》, Paris, PUF, 1968)．だが，このイメージによって私自身のうちに引き起こされ，以下で私が提出する諸々の疑問は，彼が立てている問いとはほとんど重なり合わない．トロティニオンは持続においてなぜ創造が可能なのかという問いに対するベルクソン哲学の解答をこの図形に見ようとしている．私がこの図形の解釈を通じて行いたいのは『物質と記憶』を研究する上でより基礎的な作業であり，それを通じて明らかにしたいのは記憶力に関するベルクソンの心理学的な考察の基本的骨格である．

円錐の底面をAB，頂点をSと呼ぶことにしよう．著者によれば，円錐SABは「私の記憶力 (ma mémoire) に蓄積された記憶の全体 (totalité des souvenirs) を表す」．そして，ABは「過去に座して (assise dans le passé) 不動のまま」であるとされ，「あらゆる瞬間に現在を表す」Sは「不断に前進する (avancer sans cesse)」とされる．このように規定されるとABとSはあたかも互いに独立して存立しているかのような印象を与える．しかし，実際にはABもSも他方を抜きにしてはそれ自身の規定を得ることができない．ABとSはそれぞれの規定を相互の関係のうちで得ているのだ．この事情を明らかにすることは円錐全体を貫く力学の解明につながる．そこでまず，ABとSのそれぞれに純粋に対応する事象内容を個別に考察して，それぞれの規定が他方との関係のうちで成立することを確認しよう．

Sはそれ自体としてはどのような事象に対応するのか．Sが接する平面をPと呼ぶことにしよう．Pは「動く平面 (plan mobile)」としての「世界」についての「私の現実的表象」を表すとされ，SはPに「不断に接触している」とされる．従って，SはPといわば地続きであり，その意味で「Pの一部」でもある．しかし，Pが「動く平面」であるということからは，ただちにSが「前進する」という事態は帰結しない．Pの〈動き〉のなかでSが〈前に進む〉ためには，Pの動きのうちにあるSの動きに〈方向〉を与える働きが必要なのだが，Sに関するここまでの規定のうちにはそのような働きを示唆するものは何も見あたらない．だが，この時点でもすでに，「動く」PとそのうちにあるSとの関係について，Sの「運動の各々に応じて」Pの「すべてが変わる」という規定 (MM, 20) を付け加えることは許されるだろう．このような仕方で経験されるのが私たちが一般に「身体」と呼ぶものであることは明らかである．今かりにSをPの「中心」とみなしてPで生起していることを主題化してみると，Sは「Pを構成するすべてのイマージュからやってくる諸作用を受けとった

り返したりしている」という記述が可能となる．この記述は身体と外界との関係を客観的に描写するものだが，SがPから「諸作用を受けとる」という描写によって知覚の発生が説明されていると考えるのは間違いである．この描写は知覚を前提としているからだ．ベルクソンはこの種の記述が前提された知覚に基づくことを示唆するために，「Sには身体のイマージュが集中する (se concentrer)」と述べている．実際，私たちの日常的な知覚においては，身体は科学的な実在論の方向に沿ってPの背後に広がるであろう不可分な物理的全体の一様相へと拡散してゆくかわりに，独力で存在しうる一個の実体のようなものとみなされる傾向がある．その理由は，この私の身体こそが外界と私の接触点として知覚可能な唯一の場所であり，まさにこの場所において私は外界から区切られているように見えるという点にある．しかし，科学の観点に立つにせよ，通常の知覚世界に定位するにせよ，Sは〈ひろがり〉をまったく欠いた「空間中の数学的点ではない」(MM, 59)．そこで，身体のイマージュは必ずしも狭い意味での知覚イマージュには限られないことになる．私の身体は「内から感情 (affections) によってもまたそれを知る」(MM, 11) ことができるようなひろがりを帯びているから，身体については外的イマージュとともに内的イマージュとでも言うべきものが存在することになる．以上から，Sがそれ自体として表しているのは，知覚される外界とのやり取りを通じて，またそれと同時進行的に経験される身体であることになる．

通常のSは「不断に前進する」．確かにそうだろう．だが，厳密に言うと，この規定は「世界についての私の現実的表象」が世界に〈もはや存在しないもの〉や〈まだ存在しないもの〉について私がもちうる表象に取り囲まれているという条件においてのみ肯定できるものだ．もしかりにこの頂点に閉じ込められて生きる人がいるとすれば，その者が自らの生を「前進」と感ずるかどうかは極めて疑わしい．「前」とか「後」とか言うためには時間のうちで次々に流れ去る出来事が同時に並置されて，それらが一

目で眺望されるような「空間に似た」(DI, 81) 何かが必要なのだが，Sのみを自らの全存在として生活するような者には，そのよう空間が開かれる可能性はほとんどないのである．ベルクソンの考えでは，もし人の生がSに切り詰められるなら，彼は「まったく純粋な現在を生き」(MM, 170)，「純粋に感覚＝運動的な状態」(MM, 187) におかれることになる．とはいえ，そのような人間の生活は現実には存在しない．だが，それに近いと思しき生の状態なら私たちの周囲に観察されている可能性がある．「例えば，犬は嬉しそうに吠えながら身をすりよせて主人を迎えるとき，もちろん主人を再認している．しかし，この再認は過去のイマージュを喚起したり，また現在の知覚にこのイマージュを近づけたりすることを含んでいるだろうか．それはむしろその動物が彼の身体によって採られたある特別な態度についてもつ意識からくるのではなかろうか」(MM, 87)．時間の〈後先〉を区別できるためには，時間の後先を同時に包括できる〈一種の空間〉が不可欠となる．犬がそうした空間を形成する必要を感ずる場合があるとすれば，彼が彼の眼前に〈もはや存在しないもの〉，つまり彼にとってはもはや「無用のもの」を「イマージュの形で」「夢見る」場合であろう．ところが，「過去は彼を魅する現在から彼を引き離すほどには興味を引かない」(MM, 87) ように見える．事実もその通りだとすれば，彼の再認はいつも「考えられるよりもむしろ生きられているはず」(MM, 87) で，そのように決して後ろを振り返ることのない彼は，自らの生活のうちにそもそも，後先を可能にする内的空間に展開すべき内容を一切もたないから，そのような空間をつくり出す必要すら感じないだろう．もし犬のように生活する人がいるとすれば，その人は「意識的自動人形」(MM, 172) あるいは「衝動の人」(MM, 170) と名づけられようが，そうした生は人間の生としては理論上存在する一つの「極限」にすぎない．なぜなら，ただ現在に適応するためだけにせよ，過去がたんに身体によって「反復 (répéter)」(MM, 87) されるだけでなく，精神によって「回想 (se souvenir)」(MM,

150) されもするのが，正常な人間の通常の記憶力の有り様だからであり，過去の表象力を一切用いずに外界に臨むことは一見労力の節約に見えて，実際には労力の無駄遣いに終わる可能性が高いからである．以上の考察から，頂点が「前進する」ことができるためには，頂点は記憶がそこで「過去に座して不動のまま」である底面によって支えられる必要があることは明らかである．

底面に移ろう．AB はそれ自体としてはどのような事象に対応するのか．過去の生活の詳細な出来事を回想することがそれ自体として楽しくて「過去に生きる人」(MM, 170) がいるとしよう．彼は次々に蘇ってくる無数の思い出，すなわち「時間における位置が正確に決定された個人的記憶 (souvenirs personnels, exactement localisés)」が彼の「過去の生活の流れ (cours) を描く」(MM, 116) ことに気づく．このような仕方で回想される無数の記憶が AB を構成する．これらの記憶が「不動のまま」であるというのは，それらが〈すでに流れ去った出来事〉を表しているからである．だが，それらが自らの〈不動性〉を得るのは，「動く平面」P の〈動性〉とのコントラストにおいてでしかない．ということは，AB はそれが私の意識に存在するときには，いつもすでに S をその「一部」とする P との対比のうちで存在するということである．著者によれば，AB を構成するこれらの記憶はすべてまとまって「私たちの記憶力の最終的かつ最大の外皮 (la dernière et la plus large enveloppe)」(MM, 116) をなすが，この外皮は私たちの記憶力が「どんな些細なことも漏らさないで一つ一つの事実や動作にその位置と日付を与える」(MM, 86) ことを物語っている．突然溺死もしくは縊死しそうになった人が「ほんのわずかの間に，生涯の忘れられていたすべての出来事が，最も微細な事情にいたるまで，起こった通りのそのままの順序で，次々に現れるのを見た」(MM, 172) という驚くべき証言は，この外皮の再生としては例外的なものだが，記憶の働きのうちには自動的な性格のものが含まれていることを浮き彫りにして

いる．さて，この「自然的な記憶力 (mémoire spontanée)」(MM, 89) とでも言うべき記憶の働きが，「損得や実用性を気にする下心なしに」「私たちの日常生活のすべてをそれらが展開するにつれて (à mesure qu'ils se déroulent)…記録する」(MM, 86) のだとすれば，AB は「不動」の記憶に新しい記憶を時事刻々付加し続けていよう．学課を暗記するような場合にふつう働かせる「有意的記憶力 (mémoire volontaire)」(MM, 93) とは本性を異にするこの記憶力は，「すべての出来事」をおのずと記録する．ということは，この記憶の自動的な働きは，P および S で発生する出来事のすべてを記録するのみならず，自らが不断に拡大し続けている外皮の「不動」分を私が意図的にせよ偶然的にせよ再現するという事実すら，その事実が発生するにつれて記録してゆくはずである．過去のある時期の生活がそのものとして想起されつつあるとき，この想起の事実は常に同時に記憶として過去のうちに保存されつつある現在でもあるのだ．蘇る過去はこの二重の意味で「過去に座して」いる．どんな知覚も，すなわち外的知覚も内的知覚も過去のイマージュの知覚も，その発生と同時に記憶化＝過去化されてゆくという考えは，「既視感」を知覚的意識への「現在の記憶」の割り込みとして分析するのに役立つだろう．

そのこと自体が楽しくて「過去に生きる人」は，彼の現在の行動にとっては「無用のもの」をいつ終わるともなく夢見，表象し，考える．彼は「夢想家」(MM, 170) である．「おぼろげな活動の基盤なしには想像的生活は存在しない」(MM, 187) から，「夢想家」は外界や自分の身体に対して漠然とした注意は払っている．例えば，彼はゆったりとソファーに腰掛けてくつろいでいなければ，過去の細かな陰影をとらえることができないことを知っている．だから，彼は過去を回想するためには現在にもそれなりの関心をもたなければならないことを知っており，その点で自らの生が過去と現在とにきっぱり分かたれていることを感じている．それで，おそらく彼は自らの生が「前進」していると感ずることすらあるだろう．S の

変化ばかりかPの変化すらもおぼろげに感受されており，感受された事柄はおのずと記録されるから，例えばソファーの座り心地が少しずつ変化することに気づくだろうし，そのことが彼が自らのうちにつくり出す一種の空間のうちで「さっき」と「今」の違いとして表象される場合すらあるだろう．彼は記憶力の「膨張 (expansion)」(MM, 185) する働きが，「自然的な記憶力」が不断に拡大させつつある外皮のすでに「不動」の部分に達するまで「膨らむ (se dilater)」(MM, 190) 人であり，かつまた記憶力を「その全所産とともに (avec tout ce qu'elle engendre)」(MM, 172) 受け入れる人なのである．彼の記憶力は外的生活に対しては必要最小限の「注意 (attention)」(MM, 7) あるいは「緊張 (tension)」(MM, 188) しか保たない．「衝動の人」が記憶力の「全所産」を退けるがゆえに，言いかえれば過去を表象する一切の能力を放棄するがゆえに，外的生活に記憶力のわずかな「膨張」も欠いたままに「注意」を傾ける人だとすれば，「夢想家」の記憶力は外界に対する最小の「緊張」を維持しつつ内界における最大の「膨張」を成し遂げるそれである．これが人間の生のもう一つの「極限」をなすことは言うまでもない．

では，Sについての，あるいはまたSを通じての意識と，ABが二重の意味で「座して」いる「過去」との関係はいかなるものか．すなわち，身体についての，あるいはまた身体を通じての意識と，すべてを記憶として記録し，保存する能力との関係はどうなっているのか．Sは〈そこで〉何かが感覚されるという意味で「感情の座」(MM, 63) であると同時に，〈そこに〉，あるいは〈それを通じて〉何かを感覚する能力の主体という意味でも「感情の座」である．この点に留意するなら，上の問いはより正確には次のように言い換えることができる．すなわち，円錐全体の見えない「座」としての過去と，Sが自ら産出する外的感覚のうちで，あるいはまた内的感覚に促されて，身体運動しようとする傾向との関係はどのようなものか．この関係を考察する上で鍵となるのは次のような事実である．

「通常は自分の過去の過程を溯って，…個人的な記憶を発見するためには，知覚が促そうとする行動から身を引き離す努力が必要である」(MM, 103).「個人的な記憶」を発見するのに努力が必要なのは，そうした努力が存在しないと「むしろ逆方向に行ってしまう」(MM, 94) 傾向，すなわち「純粋に感覚＝運動的な状態」に切り詰められようとする傾向が円錐全体を貫いているからだ．しかし，この傾向が衰弱すると逆に「自然的な記憶力の高揚 (exaltation) が確認される」(MM, 91)．つまり，「現在の平衡を有利に安定させることのできないすべての自然的記憶の制止」(MM, 91) が困難になる．S に切り詰められようとする傾向と AB の「不動」の部分が自らを繰り広げようとする傾向にはそれぞれ様々な程度がありうるが，両者は一般には反比例の関係にある．すなわち，前者の傾向が強まると後者の傾向が抑えられ，後者の傾向が大きくなると前者の傾向が小さくなる．しかし，一つの傾向の強化は通常はその傾向の独り歩きないしは暴走にまではいたらないし，一つの傾向の減少は通常はその傾向の自己放棄にまではいたらない．いずれの傾向も必ず反対方向の傾向によって制限されるのである．従って，これら二つの傾向が互いに協力し合う形で推し進められる現実の生活においては，「記憶力の無数の可能的状態が時事刻々生じてくる」(MM, 187) ことになる．これはつまるところ，現在と過去の関係としての円錐体の重心は通常は S にも AB にも存在しないということである．重心はふつうは頂点と底面の「あいだを動いて (se mouvoir entre elles)，かわるがわる (tour à tour) 中間の断面によって表される位置」(MM, 181, Fig. 5)〔図 2〕を占めるのだ．従って，S と AB との関係を，その具体的な諸形態において研究するためには，「現在の状況の輪郭を正確にたどるには十分に素直 (docile) でありながら，他のすべての呼びかけに抵抗するには十分に精力的な (énergique) 記憶力」(MM, 170) の働きを追跡する必要がある．中間に位置する諸断面は行動を有利に導くのにちょうど必要なだけの記憶，すなわち AB に位置する記憶群に元来そ

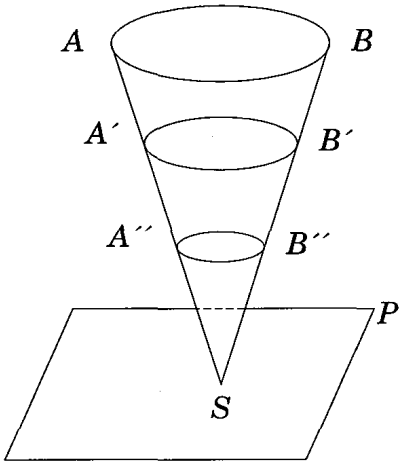

図2

なわる個人的要素のそれらの記憶からの捨象度を表すからである．

「現在の状況」をたどるには「十分に素直」で，それ以外の要求に抵抗するには「十分に精力的な」記憶力の働きを例証するために，ある外国語の単語の発音が私に聞こえてくる場合に何が起こるかを観察してみよう．その場合，私は「その外国語一般のこと」を思い浮かべることもあれば，「かつてある仕方でそれを発音したある声音のこと」を思い起こすこともある．著者によれば，これらの類似連合は「異なった二つの精神的状態 (deux dispositions mentales diverses)」，すなわち「直接的反応」としての行動の方に傾く状態と「不動」の「純粋イマージュ」の方に傾く状態という「記憶力の緊張の異なった二つの程度」に対応している (MM, 188–9)．前者と後者の違いは頂点に切り詰められることへの傾きの度合いの違い，言い換えれば「直接的反応」としての行動への傾きの度合いの違いを表す．従って，AB から S に向かって異なる距離を隔てて描かれる同心円 A′B′, A″B″等は，私がこれから目指す行動のために一時行動を中断する際に描き出される過去の生活であり，そこで現実化してくる記憶内容は私が目論む行動の規模や内容に応じて多様に変化する[1]．具体的には，現実化する記憶群は頂点に近いほど「個人的な元の形態 (leur forme personnelle et originelle) からますます遠ざかり，その平板さにおいてますま

す現在の知覚に適用でき，個体を包含する種のような仕方でそれを規定できるようになる」(MM, 116). ここで問題となる記憶の一般化現象は，記憶が一般化する傾向としての一般観念とともに，実生活に有用な記憶力の機能を研究する際に検討しなければならない主要な二つの主題をなすのだが，これらの問題の検討に入る前に，「私の記憶力に蓄積された記憶の全体を表す」円錐全体とその内部に描かれる断面の一般的関係についてあらかじめ考察しておこう.

例えばA′B′が描かれるとき，A′B′を上と下から挟み込んでいる円錐はA′B′に対してどのような仕方で存在しているのか. 著者の考えでは，どの断面においても「精神は常に自らを全部残らず与えて」(MM, 115)おり，いずれの同心円においても記憶力は「いつも全面的に自分自身に現前している」(MM, 191). これはつまり，どの断面が展開されるときでも，円錐全体がその断面を取り巻き，いわばその光り輝く面に意味を与える暗がりとして機能するということである. 上に挙げた例で言えば，私がある外国語の単語の発音を聞いて「かつてある仕方でそれを発音したある声音のこと」を思い出すとき，私に明瞭に意識されるのはその「声音」であるが，私はそれと同時にはっきりそれと意識することなく，その「声音」が私がその外国語についてもつ記憶群一般に属することを知っており，その「声音」の主に関して私がもつ記憶のすべてがその「声音」の背後に控えていると感じている. このような意味においてA′B′は私の「過去の生活全体の反復なのである」(MM, 188). この点をよく理解するために，今かりにABの同心円がSに向かってだんだん縮小してゆき，ついにはSとぴったり一致してしまう場合を想像してみよう. そこでもやはり「私たちの過去の生活全体」が反復されているだろうか. 著者によれば，そこは「私たちの精神生活を出来る限り単純化した場合に相当する点」(MM, 185)であり，この点で営まれる精神生活においては「すべての知覚は自らを自分自身で(d'elle-même)適切な反応にまで引き延ばす」

(MM, 185). この「自分自身で」という副詞が意味しているのは，現在の知覚が「過去の知覚との類似によって」(MM, 186) 過去の知覚がつくり上げた運動機構を働かせるということにほかならない．ここには現在の知覚の過去の知覚との類似連合と，それと「ほとんど混然一体となった」近接連合，すなわち過去の知覚と類似連合する現在の知覚によって過去の知覚に近接して起こった運動が反復される近接連合が見られる．そして，これら二つの連合は「いささかも思考されていない」．それらはたんに「演じられ生きられている」にすぎない (MM, 186). だが，それでもやはりこの点を生きる者は自らが今何をなしているかを〈表象するのとは別の仕方で〉知っているだろう[2]．この状態が限りなく夢遊病的に見えるとしても，この状態は外的生活に対する実際的注意，すなわち精神の「緊張」が一切途切れる現実の夢遊病とは明瞭に区別される．そこで，著者は「私たちの過去の生活全体の反復」が次の二通りの仕方で起こると考えることでこの問題に決着をつけるわけだ．「完全な記憶力は現在の状態の呼びかけに同時になされる二つの運動によって答える．一つは移動 (translation) 運動であって，これによって記憶力はそっくりそのまま経験に向かって進み，こうして行動のために分かたれることなく様々な程度で収縮する (se contracter plus ou moins). 今一つは自転 (rotation sur elle - même) 運動であり，これによって記憶力は現在の状況へと方向をとりながら，一番役に立つ側面をそこに差し出す (présenter)」(MM, 188). S に吸収される B の同心円，すなわち記憶力の最大の「縮小 (réduction)」(MM, 188) は，現在の状況に一番役立つ側面をわざわざ「差し出す」「自転運動」なしに，現在の状況の「呼びかけ」に「適切な反応」によって直接応答する記憶力なのである．「私たちの過去の生活」は「反省のみがばらばらな断片に分かつ未分の全体としていつも直接的意識に全部いっしょに与えられている」(MM, 185) のだが，ここではそれは一切の想起＝表象作用なしに私たちの「直接的意識」にそっくり与えられているのだ．とすれば，犬のよ

うに「生活を続けてゆくだけで満足するような生物」(MM, 89) の場合も,「たぶん過去のおぼろげなイマージュは現在の知覚をはみ出しているだろう」. それどころか,「彼の意識にはその全過去が潜在的に描かれているとすら考えられるかもしれない」(MM, 87).「円錐形」の哲学からはデカルト風の動物機械説は生じようがないのだ.

さて, AB と S という「二つの極限のあいだを揺れ動く」「私たちの正常な心理生活」(MM, 187) の本質を理解するためには, それが産出する二つの心理的現実, すなわち行動を有利に導くのに「ちょうど十分なだけの観念」と「ちょうど十分なだけのイマージュ」(MM, 181) を, それらが発生してくるその場所で捉えなければならない. 著者はこれらの観念とイマージュの発生の問題を「一般観念」と「個体の知覚」の発生の問題として提起している.「私たちが有益な行動へと分散させる知覚」(MM, 112) の多くは既知の概念によって瞬時に包摂される知覚であり,「注意的知覚」(MM, 112) あるいは「反省的知覚」(MM, 114) は「能動的に創造され, 対象と同一であるかそれとも類似し, その輪郭に即して現れるイマージュを外部に投射する働き」(MM, 112) だからである. 前者の知覚は自らを一般観念のうちに吸収するや否や行動へと散逸する知覚であり, 後者の知覚は現在の知覚を過去の知覚によって「強め豊かに」(MM, 111) し,「実在のより深い層」(MM, 115) を考慮して行動を決定しようとする知覚である. では, 一般性の表象と個体性の表象はどのように発生してくるのか. 著者によれば,「一般観念の明晰な表象は知性の彫琢」であり,「個々の対象の判明な区別は知覚の贅沢品」である. なぜなら,「事物に関する私たちの知覚のまったく功利的な起源に思いを致すならば…与えられた状況において私たちの関心を引くもの, 私たちがまず捉えなければならないものは, ある傾向 (une tendance) ないしは欲求 (un besoin) に応ずることのできるその側面 (le côté) である」ことは明らかで, そうした傾向あるいは欲求に答えることのできる事物の側面は何よりもまず「目立つ

性質あるいは類似の漠然たる感じ (un sentiment confus de qualité marquante ou de ressemblance)」として経験されるからである (MM, 176). 例えば，私たちの身体が白い事物一般への傾向を，そして話を単純にするためにそうした傾向のみをもっていると仮定しよう．当然この傾向は私たちを現在の知覚に含まれる白い事物か，あるいはまた知覚される事物に含まれる白さに向かわせるだろう．こうして例えば「白い百合」は身体的な傾向がそれを出迎える事物に出会うというただそれだけの事実によって知覚のうちで際立ってくる．また，それを「目立つ」ものにさせるのが身体的な傾向であるという理由から，その際立ちは身体によって「感じられ…自動的に演じられる…」(MM, 178) ことになる．このような仕方で経験された「白い百合」は身体に一定の痕跡を残すとともに精神に一定の記憶を残すから，例えば別の機会に経験される「雪野原」は「目立つ」と同時にかつて経験されたものとの「類似の漠然たる感じ」をもたらすだろう．著者の考えでは，このような仕方で発生してくる「百合」と「雪野原」の「類似の漠然たる感じ」から「一般観念」と「個体の知覚」が生成してくるのだが，この「感じ」はそれ自体として複雑な構造をもっているので，その点についてあらかじめ若干の考察が必要である．今見ている「雪野原」にかつて見た「百合」がダブってくる場合，「百合」はいつもそれが知覚されたときの状況もろともはっきり思い浮かべられるわけではない．それはたんにいつかどこかで見た「百合」である場合もあれば，たんなる「白さ」のイマージュである場合もあるだろう．しかし，ほとんどの場合，このダブりの感じはたんに「見たことがある」という感じ (le sentiment du《déjà vu》) にすぎないだろう．従って，このような感じとともに現れてくる「雪野原の白さ」は雪野原そのものに属しているというよりも，雪野原と雪野原とともにその白さを分有している〈何か〉との中間に位置しているように感じられるはずだ．その際，雪野原とともに白さを帯びている何かは雪野原の知覚の背後に潜んでいて，必要とあればいつでも姿を現

すことができるが，必要がない限りは隠れたままである．「類似の漠然たる感じ」は，かつてどこかで知覚されたことがあるが今は表象されていない何かとの類似の感じなのだ．かつてどこかで知覚されたものの特殊性は，それが今知覚されているものの背後に隠れている限りは浮き彫りにならないし，その特殊性が浮き彫りにならない限りは今知覚されているものの特殊性も際立ってこないだろう．両者の特殊性があらわになるためには，両者が交互に表象される必要がある．両者がかわるがわる表象されない限り，両者の個性は両者が分有するもののうちに吸収され没したままであろう．とはいえ，この吸収は完全な合一にまではいたらない．それどころか，「イマージュの記憶力」(MM, 176) に基づく「差異に注目する能力」(MM, 176) はいつでも発動できる状態にある．すなわち，一方は可視的でもう一方は不可視の融合寸前の両者，「見たことがある」という感じによってかろうじて分かたれている両者を分かち，不可視のものを可視的にし，両者を交互に見ながら比較検討できる状態にある．どうすればここから出発して「類」の「完全な把握」(MM, 176) と「対象の個性」(MM, 176) の把握に到達することができるだろうか．

「類」を明瞭に表象するには，「時間と空間の特殊性を消すための反省の努力を必要」とする (MM, 176)．他方，「対象の個性」を判明に知覚するには「差異に注目する能力」を実際に作動させる必要がある．ところで，上の考察から明らかになったことは，今知覚されている「雪野原の白さ」とかつて知覚された「百合の白さ」がそれぞれもつ「時間と空間の特殊性」は，「見たことがある」という感じを伴う前者の知覚のうちにいわば潜在的に与えられているということである．そこで，両者の「特殊性」を消すのはわけもないことになる．消えかかっているものを消すだけでよいからだ．努力を要するのはむしろ両者の生きられた類似性を明瞭な「類」にまで高めることにある．「類」は物に象られて表象されねばならない非物体的な何かだからであり，その限りで「類」の措定は今まで存在しな

かった一種の物を現実に存在する諸物に新たに付加する働きだからだ．また，非物体的なこの一種の物は極めて「不安定な消え入りやすい」(MM, 180) ものであるから，発音される語として本当に物質化することでそのもろさを補強しなければならない．こうして両者の類似性は両者を包含する「類」として立ち上がってくる．この「類」はその必要があれば行動を有利に導くのに「ちょうど十分なだけの観念」として機能しうるはずだ．しかし，このように産出され機能する一般観念は円錐のどの断面によっても表示することができない．なぜなら一般観念は行動の必要下に一つの断面を描こうとする傾向にすぎないからであり，一つの断面が含みうる数々の記憶を潜在的にしか含まない空虚な表象にすぎないからだ．従って，この表象はそのうつろさゆえに絶えず「結晶して発音された語になろうとするか，蒸発して記憶になろうとしている」(MM, 180)．つまり，この表象はそれ自体としては注視の対象となるような堅固なものを何一つそなえていないわけで，そうだからこそ行動に素早くきっかけを与えたり思考をすみやかに推し進めたりするのに役立つのである．他方，両者の「特殊性」を顕在化させるには，知覚の後ろに消えかかっているものにあらためて注視して，それを過去に向かって膨らましてゆけばよい．すると，両者の類似性は背景に押しやられ，おのおのの「特殊性」が交互に自らを主張し始めるだろう．ここで現れてくるかつての対象の「個性」は必要とあれば行動の選択に指針を与えるのに「ちょうど十分なだけのイマージュ」として固定されるはずだ．

最後に「円錐形」の哲学が掠めてはいるが，その範囲を越え出ている問題について一言述べておこう．それは底面が接触する底面の外部，すなわちBが「座して」いる「過去」の問題である．ABが過去に「座して」「不動なまま」であるのは確かだが，それはABに位置する記憶の系列が想起される限りにおいてでしかない．だが，ABの「不動」の部分がありのままに再生されつつあるときですら，ABはそれが「座して」いる過去

のうちで不断に成長を続けている．そこで，円錐体はますます大きくなるABの同心円を，ABの外側に広げてゆくことになる．それゆえ，大きくなることをやめない円錐全体が「座して」いる過去，あるいはむしろそのなかでABが絶えまなく膨れ上がってゆく過去が問題になる．この過去はドゥルーズによれば，著者が「過去一般 (le passé en général)」(MM, 148) という語を用いた際に念頭にあったはずのものである．この問題が「円錐形」の哲学を越え出ているというのは，この語によって指示されているのが円錐体と〈同時〉に与えられているはずの円錐全体の不可視の外部だからである．しかし，この問題は円錐が全体として「私の記憶力に蓄積された記憶の全体を表す」と規定された際にすでに提起可能な問題だったのである．というのも，この規定からは，「記憶の全体」がそこに「蓄積された」「私の記憶力」，すなわち「純粋記憶力 (mémoire pure)」(MM, 173) それ自体はどこにどう表示することができるのか，という当然起こってくる疑問に対して明瞭な答えを引き出すことができないからであり，この規定が与えられる第三章の最後のほうで著者自身も「精神の活動は蓄積された記憶の全体を無限に越える…」(MM, 193) と述べているからである．

注

"Matière et mémoire" からの引用はすべてQuadrige版によった．

(1)　とはいえ，ベルクソンは「こうした心理学はすべてまだこれから建設されるべきものであり，私たちはさしあたってはそれを試みようとする意図さえない」(MM, 189) と述べている．

(2)　イポリットはある論文のなかで「純粋記憶」とは「純粋知」であると述べている ('Aspects divers de la mémoire chez Bergson', Revue internationale de Philoso-phie, n°10, 1949). この解釈が正しいとすれば（私は正しいと思うが，その論証は別の機会に譲りたい），S点に縮小された存在が自らの行動を〈知る〉のは彼が保存する「純粋記憶」によるということになる．

本稿は1997年4月4日に東京江東区の豊洲文化センターで催された第一回ベルクソン哲学研究会で口頭発表した研究原稿に若干の加筆，修正を施したものである．